

ボアジチ大学
交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部

国際言語文化学科 4年 英米文化コース

光陰矢の如し。トルコでの10か月間はこの言葉がぴったりのほどあっという間に過ぎてしまった。まだ日本に帰国し2週間しか経っていないが、毎日のように美しいボスポラス海峡を見ながら大学に通学したり、チャイを飲みながら友達と話を弾ませたりなど、この10か月間で当たり前になっていたことが急に当たり前でなくなり、とても寂しい気持ちで一杯である。そんな中、ボアジチ大学での学業やトルコでの生活を振り返ってみると、様々な意味で非日常的で充実した日々を過ごせたと思う。勿論、そのような中で今までとは違った価値観や考え方にも触れることができ、留学前の自分とは一段と広い視野を持てるようにもなった。そこで、今回の留学報告書では私の視野を広げる契機ともなったトルコでの生活体験を報告させていただきたい。

まずは、トルコ・ボアジチ大学での学業生活について報告したい。トルコ・ボアジチ大学では政治学・国際関係学を専攻し、基礎的な内容を扱うものから、より専門的な内容を扱うものまで様々な授業を受講した。基礎的な授業では、「外交史」や「国際関係論入門」などを、専門的な科目については、「朝鮮史」や「トルコ政治」などを、また聴講という形では「トルコにおける外交政策の問題点」の授業も受講した。私が履修した授業は全て講義形式だったが、規模は授業によって異なり、大講義で200人ほどの規模で行うものもあれば10人ほどの少数人数制で行うものまで様々であった。

留学する前から心の中でわくわくしていた英語での授業は、留学当初こそは授業のスピードやリーディングの多さに慣れていなかったため不安を覚えることもあったが、時間が経つにつれそれらにも段々と慣れていき、前期の中盤あたりからは余裕をもって授業を受けることができた。また、言うまでもなくボアジチ大学での授業は質も高く、何よりテストの内容が難しかったことを覚えている。一生懸命勉強したはずなのに、テストの点数が芳しくなかった時も何度もあったが、私なりに予習の段階から授業後の復習まで努力をし、次こそはもっといい結果を取れるようにと努力した。勿論、テストで良い結果を取ることを考えるのではなく、授業の中身を理解できていることが最も重要だと考え、授業中に聞き取れなかったところはレコードしたものを授業後に聞き直したり友達に聞くなどをして内容の理解に励んだ。

ボアジチ大学でボアジチ学生と同じ授業を受け、出会った友達を観察していく中で今でも印象に残っていることは、学生の学習意欲と意識の高さである。授業中の学生の積極性は非常に高く、また授業後には生徒たちだけで授業の内容について議論をしている姿を何度も見た。また、学内で会う友達の多くが空き時間をただ友達と過ごすだけでなく、図書館に通い有効活用していたことも覚えている。更にダブルメジャーをしている学生が見られるように、自分の専門プラスαの事を学ぼうとする学生も多く、その他にもインターンシップへ積極的に参加する学

生や、新しい言語を習得するために平日だけではなく土日の時間を使っている学生にもたくさん出会った。

ボアジチ学生の学習意欲や向上心が高いのは、トルコの中でもトップクラスの大学だから皆の意識が高いであるとか、勉強をすることに苦を感じない人が多いとか、様々な理由が挙げられるとは思うが、私は友達と話している中で未来に対する不安感も彼らをあそこまで能動的に動かす理由の一つであると感じた。友達の一人はボアジチ大学を卒業したとしてもトルコのこれからは期待が持てず、海外での就職を希望しロシア語を必死に勉強していたし、彼と同じような考えを持っている学生にもたくさん出会った。トルコは G20 のメンバーでもあり、今後の経済成長が見込まれる VISTA の一国でもあるが、近年の経済状況は安定しておらず、また政治的にも不安定な状況が続いている。よって、多くの学生が卒業後の安定した生活を求め、大学生の間に自分の能力を高めようと必死になって努力しているのだと思う。

そして、こういった学生と出会う中で、私は「勉強」に対し改めて考えさせられた。ボアジチ大学で出会ったある友達は、将来の安定性の観点から他大学の医学部への進学を両親から強く勧められたが、最終的にはボアジチ大学に進学することを決め、現在政治学を学んでいる。そして、将来は親を見返すためにも外務省への就職を目指し、毎日勉学に一生懸命励んでいる。彼のような将来に向けて必死に勉

強しているボアジチ大学の学生達を隣で見ていく中で、正直今までの私は彼らと比べると生ぬるい気持ちで大学に通い、授業を受けていたのだと感じた。自分自身ではそれなりに大学入学後から、将来の事を考えそれなりに勉学に励んできたとは考えていたが、単純に甘かった。私が出会ったボアジチ学生はもっと将来の事を考え、もっと真剣に今と向き合い努力していた。もちろん、将来に不安を感じ勉学に励む学生は日本にもいる。しかし、ボアジチ学生からは必死さがもっと伝わってきた。それ以降、私は「勉強」に対して今以上に真剣に取り組もうと思ったし、何よりトルコ・ボアジチ大学での学業をより頑張ろうと考えるようになった。

次に、トルコでの生活とそれを通して感じたことについて報告させていただきたい。トルコでの生活は日本のそれとは違って時間がゆっくりと流れている感じがして、居心地がよかった。ボアジチ大学周辺では朝から夜遅くまで老若男女を問わずみんながチャイを片手に世間話をしていたし、働いている人たちもマイペースにのんびりと働いており、非常に穏やかで平和な時間が流れていた。日本でのせわしない生活に慣れていて私は、最初こそはそのトルコのゆっくりとした雰囲気にはイラっとすることもあったが、途中からはそれにも慣れて、並大抵な事が起きない限りは動揺しなくなっていたように思う。

そんな私が住んでいたイスタンブールは、トルコの中でも最も発展した都市であったため生活に困ることはほぼなかった。欲しいものは簡単に入手でき、行きた

いところにはバスやトラム、メトロなど様々な手段で簡単に行くことができた。また、トルコは学生に非常に優しい国であり、学生であれば様々な歴史的建築物や観光スポットにも無料または半額で入場でき、交通機関も普通の半額程度の金額で使用することができた。言語に関していえば、イスタンブール内でも英語は通じないことが多く、人々とコミュニケーションをとるためにトルコ語の学習が自然と必要になった。

ボアジチ大学での授業が無い週末などには、大学で出会った友達と時間を共にすることが多かったと思う。大学周辺のご飯屋でカフヴァルトと呼ばれるトルコ風朝ごはんを食べて世間話をするのもあれば、イスタンブール内を観光することもあった。また、友達の実家に招待されて行くことも後期に入ってからが多かったように感じる。トルコ国内はたくさん観光したが、各地域で宗教色が異なりそれを観察することも楽しかったこと記憶している。

そして、そんなトルコでの生活を報告する上で切り離すことができないことと言えば、宗教である。人口の大多数がイスラム教徒であるトルコでは、日々の生活を過ごしているだけでもイスラム教を感じることもできた。ヒジャブを被った女性はもちろんのこと、モスクなども至る所で目にする事ができるし、コーランの

一節をうたったアザーンは誰もが眠っている早朝から毎日流されていた。ここまで宗教を肌身で感じることができるトルコの生活は、宗教とは縁のない生活を今まで過ごしてきた私にとって、「ザ・異世界」といった感じであった。

そんな宗教を身近に感じることができるトルコでの生活で、宗教が関係して困ったことといえば、長距離バスで女性の隣の席に座れないこと、ポークを食べることができないことくらいしか頭に浮かばず、その他は何も問題なく過ごせたと思う。また、トルコへ来る前には、「宗教を持たないことがトルコ人との円滑な関係を気づく上での足かせになるのではないか」などといった不安も抱いていたが、考えるだけ無駄であった。勿論ムスリムの中にも悪い人はいるが、多くが宗教に関係なく誰にでも親切で、情が深い人々であった。モスクに行った際に全く面識がないにも関わらず中の案内を丁寧にしてくれる人もいれば、ラマダンの時期に一日の断食後に行う夕食会（イフタール）に誘ってくれる人々にも出会うことができた。

10 か月のトルコでの留學生活でイスラム教に触れる機会はたくさんあり、ムスリムの人々の親切な対応を受ける中で、「私たちが信じているものを知ってほしい」という彼らの気持ちを感じることもあった。そして、それを感じるたびに宗教に向き合ってみようと思ひ、試みたことを今でも覚えている。しかし、向き合ってみれば考えるほど彼らの信じるものが理解できず、「なぜ目に見えないものを信じることができるのか」と思わざるを得なかった。また、宗教は時に人々の自由を制限

してしまう。特にイスラムの世界では女性が車を運転してはいけなかったり、サッカースタジアムに試合を観に行くことさえも禁止されていたりと女性の権利が確保されていないことも多い。(イランでは今回のワールドカップで女性のパブリックビューイングでの観戦が認められたが。) 私にとっては自由を制限してしまうコーランの教えを守ろうとすることの理解にも苦しんだ。

そして、更に私を困惑させたのは、人によって信仰の度合いに大きな差がある事である。毎日礼拝には行くがお酒を飲んでいるという人もいれば、ラマダンの時期に「今年は断食しないけど、去年は断食をしたよ」とか「断食はしているけど、今日はお酒を飲むよ。」と話している人も多くいた。また、そういった教えを守っていない人々でも当たり前のように自分のことをムスリムと名乗ることに驚いた。特にボアジチ大学には敬虔なムスリムが多くいる一方で、こういったタイプの学生も多く、私はここまで信仰心・敬虔の度合いがバラバラで、イスラムの教えの解釈が異なってしまうイスラム教の存在意義にも少しだけ疑問を抱いてしまった。

宗教に触れれば触れるほど、疑問は増えるばかりではあったが、10か月間のトルコ・ボアジチ大学での留学生活を通して宗教、特にイスラム教に対する理解は以前より深まったと思う。イスラム教の教義の内容はもちろんのことだが、それを信仰している人々の環境についての理解も深まった。やはり、イスラム教はトルコ全体の社会に深く結びついており、それを信仰している人々も家族の影響などで小さ

い時から当たり前のようにイスラム教に触れている。よって、なんの疑いも持たずに信仰することが当たり前だと考えている人も少なくない。実際、モスクに行った際に小さい子供が両親と一緒に来ている姿を見ることは普通であるし、ラマダンの時期にはモスクの近くで夜遅くになっても子供が集まって遊んでいる姿もよく目にした。コミュニティ、家族を通して日々の生活にイスラム教が密接に関わってくることで、それが無い生活を考える機会を得ることは難しいのではないかと感じた。また、これを裏付ける事実として、ボアジチ大学のような世俗的な大学に進学し、色々な人々に会うことで、今までイスラム教の教えに何の疑いも抱かなかった人がまるで別人のようにお酒を飲み始めたり、礼拝をしなくなることも珍しくない。このような発見はその地で実際に生活してみることによって得られることだと思うので、トルコで実際に沢山の人々と触れ合いながら観察することができて良かったと思う。

最後になるが、このような貴重な体験をする機会を与えてくださった静岡県立大学、そして私を受け入れてくださったボアジチ大学の関係者のすべての方々に、心からの感謝を申し上げたい。奨学金などの金銭的な援助から、留学が始まる前と始まった後にわたってして頂いた手厚いサポートがあったからこそ、私のボアジチ大学での留学が内容の濃い充実したものとなった。また、私費留学では今まで述べたような経験ができ

なかったことも確信している。今後は、異文化の地・トルコで受けた刺激、そして経験

して感じたことを忘れずに今後の大学生活、そして卒業後のキャリアを過ごして

いきたいと考えている。